

平成 30 年 5 月 29 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370064

研究課題名(和文)ポスト九学会連合調査の宗教学的奄美研究

研究課題名(英文)Religious Studies on Amami Islands as a Post Association for Nine Academic Societies

研究代表者

西村 明(Nishimura, Akira)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・准教授

研究者番号：00381145

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文):本研究で明らかになったことは、(1)Iターン者たちが島の生活環境に適応しつつ、自らの価値観に沿って既存の社会のあり方に「介入」的に関わる様態、(2)神社については維持管理状況に神社ごとの差があり、神社の盛衰は個人の病気治療や祖先祭祀といったミクロな要因が相互に関連して生じていること、(3)カトリックと創価学会のアンケート調査から、島を離れUターンした信者たちが比較的短期間のうちに、家族や郷土愛に基づいて帰島し、その後信仰の深まりを経験している信仰実態が見えたこと、(4)プロテスタントについては、歴史的に台湾から朝鮮半島に及び福音主義的傾向の強い伝道圏に奄美も位置付けられること、にまとめられる。

研究成果の概要(英文):This research project revealed that (1) Immigrants from outside of Amami islands intervene the islands' society according to their own value judgement as well as accommodate the islands' life environment; (2) Shinto Shrines have variety in terms of the operation and maintenance and their rise and decline derive from the personal and family factors like disease therapy and ancestor worship; (3) Questionnaires to the adherents of Catholic and Soka Gakkai represent the actual condition of their faith that the returner from outside of the islands came back home in the relatively short term due to their love of family and hometown and experienced the deepening of their faith; (4) Amami islands can be situated historically within the missionary sphere with strong tendency of Evangelicalism that extends from Taiwan to Korean peninsula.

研究分野：宗教学

キーワード：奄美群島 九学会連合 Iターン 神社 カトリック 創価学会 プロテスタント

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、奄美群島域をフィールドとした宗教研究の今日的可能性を探究するものである。その背景には九学会連合による2度の奄美調査がある。九学会連合の共同調査は、戦後直後から民俗学など関連諸学とともに40年間行われたが、近年その意義を再検証する動きもある(坂野2012)。対馬や能登などで行われた8回の共同調査のうち、2度調査されたのは奄美群島だけであり(1950年代後半と70年代後半)、唯一定点観察の性格を持っていると言える。

宗教学の分野では、50年代の調査には、小口偉一や高木宏夫が参加し、ノロやユタのシャーマンの実態解明に貢献した。70年代には、安斎伸、藤井正雄、菌田稔、中牧弘允、井上順孝らが参加し、前回の沖縄調査の延長上で外来宗教の移入の影響をテーマとした調査を行った。

2013年は奄美の日本復帰60周年の年であり、復帰直後に行われた50年代の調査から2世代後の動向を捉えることができる好機となっている。50年代調査が奄美社会の静態的宗教世界の把握であったとすれば、70年代調査は外来宗教の影響という動態的調査であったが、外部から島内へという二元的単方向研究にとどまった。

しかし、奄美社会の現状を見れば、近代以降見られる群島内から都市部への移住に加え、近年では群島内への移住者(Uターン・Iターンを含む)もあり、活発な人口移動が見られる。世界自然遺産化を目指す奄美の自然や文化伝承に注目した国内外のツーリストが増えているばかりではなく、福島原発事故を受け放射線被害を懸念する移住者が奄美地域にも見られる。それ以前からエコロジーやスピリチュアリティの思想的背景を持って、あえて地方の農山漁村や離島を生活の拠点として選択し、その環境に沿ったライフスタイルを築こうとしている人々のもつ宗教性について

は、いまだ十分研究が行われていない。スピリチュアリティ研究の分野では、個人に注目することで教団調査では得られない現代人の宗教性の多様な展開が視野に収められるようになったが、都市生活者に焦点が置かれているため、こうした動態性の把握にまでは至っていない現状にある。

## 2. 研究の目的

本研究は、奄美群島域をフィールドとした宗教研究の今日的可能性を探究するものであった。九学会連合による2度の奄美調査と、スピリチュアリティ研究の個人調査を踏まえつつ、現代のダイナミックな社会状況下での奄美住民(他地域在住の奄美出身者も含む)の宗教性と信仰実践、それに環境に対する意識も含めた価値意識の見取り図を、主にインタビュー調査と観察調査から明らかにすることをメインテーマとした。同時に、柳川啓一資料の整理を通して、九学会連合調査の40年間のフィールドワーク型宗教研究のレビューをサブテーマとして設定した。

## 3. 研究の方法

1) スピリチュアリティ研究、2) 民間信仰研究、3) 神社神道研究、4) 仏教研究、5) カトリック研究、6) プロテスタント研究、7) 新宗教研究、の7点を掲げ、各項目について複数メンバーによる協力体制のもと、調査項目の設定とアプローチ法を吟味する。年度ごとに成果目標を設定し、平成26年度(初年度)：調査準備&パイロット調査、平成27年度(2年目)：本調査の開始、平成28年度(3年目)：継続・追加調査および成果中間発表、平成29年度(最終年度)：調査整理および成果発表とした。

## 4. 研究成果

上記の7点について、いくつかの項目を集約しながら成果の概要をまとめる。

1) 研究代表者の西村は研究協力者である東大宗教学研究室および社会学研究室内の大学院生とともに、奄美大島奄美市・瀬戸内町加計呂麻島、徳之島伊仙町・徳之島町・天城町において、インタビュー調査を行った。とりわけ島外出身のIターン者がどのように島に住むようになり、現地での生活において島の伝統的な文化や規範をどのように受け入れ

(あるいは受け入れず)それぞれの価値観に沿った生き方を追求しているのかに焦点を当て、「参入」(既存の社会関係・価値観に順応する方向性)と「介入」(それらを改変しようとする方向性)に注意しながら調査を行った。

Iターン者たちは概して、島での生活の不便さや厳しさにまして、自然環境の豊かさや都市生活とは異なるリズム・人間関係の濃さといった生活環境が価値の高いものとして受け取っていたが、細かい点ではそれぞれに島社会との関わり方でヴァリエーションが見られた。島の濃い人間関係にしがらみを感じながらもそれによって癒しを得ることで、積極的に集落行事や島に貢献する活動(定住促進の活動)などを行うようになった事例がある一方で、逆にそうした関係は極力避けて島の自然環境を享受する個人主義的な生活を選択する事例もある。前者では、結婚や子供の存在が集落への「参入」に正に機能する事例が多く見られたが、Iターン者が島の生活ぶり・価値観をすべて受け入れているわけではなく、それぞれに島の現状に対する「介入」を試みていることがうかがわれた。航空便の新規就航やインターネットなどの情報環境の整備により、こうした動きはますます加速化する状況にある一方で、世界自然遺産への登録に向けた取り組みから自然環境や伝統文化への最注目機運も高まってきており、現在進行形で変化している様子もうかがわれた。

2) および3) 研究分担者の町泰樹は、奄美

大島本島北部(旧笠利町・旧名瀬市・龍郷町)の神社に関する郷土誌の記述を整理するとともに、現地調査を行った。

奄美大島北部には多様な神社が存在しており、それらは1975年から1977年にかけて実施された九学会連合による第二次奄美群島調査に参加した藺田稔が、神社創建の由来に基づいて類型化している(藺田1977、1982)。町による調査では、神社の維持管理の状況に神社ごとに差があること、郷土誌等の記述から、神社の盛衰に関しては、戦争や祖国復帰運動といったマクロな要因のみならず、個人の病気治療や祖先祭祀といったミクロな要因が相互に関連して生じていることが明らかになった。これらミクロな要因は、シャーマニズムや祖先崇拜といった現地の民俗信仰に基づいており、それらが外部から移入された神社を支えていることも確認した。

5) および7)

平成28年度に研究分担者の島忠篤と研究協力者の李賢京は、奄美大島におけるカトリック教会信徒と創価学会会員を対象とした信仰と社会移動の関係についてのアンケート調査を実施した。そのデータ分析から以下の諸点が明らかとなった。

(カトリック)

- ・年齢層が比較的若い信者の場合、代々カトリックの家で生まれて幼児洗礼を受けた人が多い一方、子どもの幼稚園を通じて入信するケースも少なくない。
- ・年齢層が高い信者が入信した当時、地域に教会があったから、そこに行けば皆に会えるから、一緒に遊べるからなど、教会の内と外の壁が低かったことが確認できる。
- ・就職や進学で島を離れるが、比較的短期間で帰島する傾向があり、その理由としては「親のために」が最も多い。
- ・帰島後、信仰は深まり、日常生活においてカトリック信仰を実践する頻度も、帰島後に高まっている。

・信者同士の付き合いは、日常生活において比較的密接な関係性は見られない。

(創価学会)

・奄美の学会員は、学会員の家族のもと奄美に生まれ自然に入信しており、信仰が家族と通じて代々継承されている。

・島出身者たちは、15～19歳の時期に就職や進学のために島を離れるが、島に帰る場合には20代が最も多く、その理由は郷土や田舎暮らしへの愛着、親の介護や親を安心させるためといった回答が多い。

・島外でも学会の活動は継続されるが、島に帰った後で親交は一層深まり実践されており、その要因として帰島後に学会員間での交流が増加し、組織内での何らかの役職や役割を得て学会への帰属意識が高まることが考えられる。

6) 研究分担者一色哲は、本プロジェクトに先行する研究において、プロテスタント・キリスト教の場合、奄美群島から沖縄・宮古・八重山の各群島にかけて、戦前には、福音主義的傾向の強い民衆的な信仰受容形態が広範に見られ、完結した伝道圏が形成されていたことを明らかにしている。これらの受容形態は、台湾や朝鮮半島での伝道体験・生活経験が伝道者・信徒を通じて同地域に持ち込まれたことも明らかになった。これらの点で、カトリックの場合も共通しているということをも本プロジェクトの報告会での比較から確認した。一方で、創価学会の布教などの事例にもキリスト教のカトリック・プロテスタントに共通するような信仰受容形態が見られることも見出された。このような共通点から、近代以前から、近代・現代にかけて、奄美群島を含めた南島地域全体に近代化による抑圧状態があり、そこから個人的・民族的救済を強く望む心性が育ったのではないかと推察している。

これら多くの点が明らかになった一方で、本プロジェクトでは期間中に十分に検討で

きなかった課題も多く残された。すべてのサブプロジェクトにおいて、必ずしも群島全体をカバーするものとなっていないことは物理的制約があるにせよ、大きな課題である。それぞれに追跡調査と比較検討することによって、新たな知見が得られるはずである。

7) の新宗教研究については複数の天理教分教会長へインタビューを実施したが、それを成果として生かすことができなかった。また、大本などの他教団への調査は時間と人員の関係より着手することができなかつたので、今後の課題としたい。4) の仏教研究についても、本プロジェクトにおいて特筆すべき成果は挙げられなかった。当初の計画にはまた柳川啓一文庫の九学会連合関係資料の整理も含まれていたが、期待したほどのまとまった資料が見つけれなかった。同連合は各学会持ち回りで事務局を務めていたため資料の散逸が著しい。これも他分野の複数の研究者との協働で取り組むべき課題である。

成果の社会還元については、学会発表や論文等での公表のほか、2017年11月に奄美大島および鹿児島において現地報告会(カトリック教会、創価学会および一般向け報告会)の機会を設けた。2018年2月の東アジア宗教研究フォーラムの場でまとまった成果報告ができたが、当初計画していた島嶼研究分野での国際的な場における発表については実施できなかった。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計9件)

- ① 李賢京、奄美群島の宗教研究の動向と課題(原文韓国語)、比較日本学(漢陽大学校日本学国際比較研究所)、査読有、40、2017、95-117
- ② 一色哲、南島キリスト教史入門：奄美・沖縄・宮古・八重山の近代とキリスト教(第25回・最終回)南島の軍事化と教会

- (2)戦場に取り残された信徒と伝道者、福音と世界、査読無、71(11)、2016、43-46
- ③ 一色哲、南島キリスト教史入門：奄美・沖縄・宮古・八重山の近代とキリスト教(第24回)南島の軍事化と教会(1)奄美大島における宗教構造とカトリック迫害の歴史的意味、福音と世界、査読無、71(10)、2016、64-67
- ④ 一色哲、南島キリスト教史入門：奄美・沖縄・宮古・八重山の近代とキリスト教(第17回)「周縁的伝道知」の形成と喜界島のキリスト教(2)磐井静治の帰還と旧日基の伝道、福音と世界、査読無、71(3)、2016、62-65
- ⑤ 一色哲、南島キリスト教史入門：奄美・沖縄・宮古・八重山の近代とキリスト教(第16回)「周縁的伝道知」の形成と喜界島のキリスト教(1)ホーリネスの伝道者・兼山常益の軌跡、福音と世界、査読無、71(2)、2016、60-63
- ⑥ 西村明、船と戦争—記憶の洋上モデルのために、思想、査読無、1096、2015、51-66
- ⑦ 一色哲、南島キリスト教史入門：奄美・沖縄・宮古・八重山の近代とキリスト教(第14回)人を育む伝道と南島キリスト教の可能性：大保富哉と徳之島・亀津教会を中心に、福音と世界、査読無、70(12)、2015、68-71
- ⑧ 一色哲、南島キリスト教史入門：奄美・沖縄・宮古・八重山の近代とキリスト教—第5回 南島における近代のはじまりと奄美におけるカトリック宣教の開始、福音と世界、査読無、70(3)、2015、50-53
- ⑨ 一色哲、南島キリスト教史入門—奄美・沖縄・宮古・八重山の近代とキリスト教—第1回 南島キリスト教の深さと広がり、福音と世界、査読無、69(11)、2014、18-30
- [学会発表] (計14件)
- ① 西村明、いま、東アジアで戦争と宗教を考えるとということ、東アジア宗教研究フォーラム第2回国際学術大会、2018
- ② 田島忠篤、奄美大島創価学会信者の社会移動—アンケート調査分析結果より、東アジア宗教研究フォーラム第2回国際学術大会、2018
- ③ 町泰樹、奄美群島における神社と民俗信仰、東アジア宗教研究フォーラム第2回国際学術大会、2018
- ④ 李賢京、奄美カトリックと社会移動—アンケート調査の結果から、東アジア宗教研究フォーラム第2回国際学術大会、2018
- ⑤ 町泰樹、奄美群島の神社と民俗信仰との関係をめぐる研究にむけて、日本宗教学会第76回学術大会、2017
- ⑥ Tadaatsu Tajima, Catholic and Soka Gakkai in the Amami Islands, ISSR/SISR 34th Conference, 2017
- ⑦ 町泰樹、調査者と被調査者とのギャップ—伝承のリアリティをめぐって—、第7回西日本宗教学会、2017
- ⑧ 町泰樹、奄美の神社ことはじめ、第1回人文社会セミナー(鹿児島工業高等専門学校)、2017
- ⑨ 町泰樹、離島の文化と社会変動—鹿児島県与論島の葬制の変容から—、技術士会九州支部CPD「かごしま技術21」、2016
- ⑩ 一色哲、1930年代以降における南島の軍事化とキリスト教、日本基督教学会 第63回学術大会、2015
- ⑪ Akira Nishimura, Mapping Minamata on Kyushu island on the geopolitical perspective and the tracing-layer movements, International Union of Anthropological and Ethnological Science, 2014
- ⑫ 西村明、ポスト九学会連合の奄美調査の可能性、日本宗教学会第73回学術大会、2014

⑬ 一色哲、東アジアのキリスト教についての交流史的研究・試論—帝国周縁部における日本教会の伝道圏形成と喜界島を事例に一、日本基督教学会第62回学術大会、2014

⑭ 町泰樹、国民国家形成期における包摂と排除—鹿児島県与論島を事例として一、鹿児島哲学会、2014

〔図書〕(計4件)

① 一色哲、南島キリスト教史入門—奄美・沖縄・宮古・八重山の近代と福音主義信仰の交流と越境—、新教出版社、2018、225ページ

② 大谷栄一・菊地暁・永岡崇編 (西村明、一色哲分担執筆)、日本宗教史のキーワード、慶應義塾大学出版会、2018(予定)、総ページ数未定

③ キース・L. カマチョ著、西村明・町泰樹訳、戦禍を記念する—グアム・サイパンの歴史と記憶—、岩波書店、2016、269ページ

④ 高宮広土・河合 湊・桑原季雄編 (財部めぐみ・西村明分担執筆)、鹿児島の島々—文化と社会・産業・自然、南方新社、2016、291ページ

〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

西村 明 (NISHIMURA, Akira)

東京大学・大学院人文社会系研究科 (文学部)・准教授

研究者番号：00381145

### (2) 研究分担者

田島 忠篤 (TAJIMA, Tadaatsu)

天使大学・看護栄養学部・教授

研究者番号：40179693

一色 哲 (ISSHIKI, Aki)

帝京科学大学・医療科学部・教授

研究者番号：70299056

町 泰樹 (MACHI, Taiki)

鹿児島工業高等専門学校・一般教育科・講師

研究者番号：30725693

### (4) 研究協力者

李 賢京 (LEE, Hyunkyung)

東海大学・文学部・講師

財部 めぐみ (TAKARABE, Megumi)

鹿児島大学・共通教育センター・非常勤講師

黒田 純一郎 (KURODA, Junichiro)

東京大学・大学院人文社会系研究科・大学院生 (以下、同様)

朴 炳道 (PARK, Byoungdo)

中村 芳雅 (NAKAMURA, Yoshimasa)

寺田 光之 (TERADA, Mitsuyuki)

葛西 慧紀 (KASAI, Satoki)

田中 浩喜 (TANAKA, Hiroki)

中村 祐希 (NAKAMURA, Yuuki)

清水 亮 (SHIMIZU, Ryo)

宮部 峻 (MIYABE, Takashi)

堀川 優奈 (HORIKAWA, Yuna)